

ところきて本当に帰国できるのかと危惧を生ずる。日本人でありながらソ連軍の手先のようになり、我々の何を調べるのか、荷物から言動の検査から、何の理由かわからずこの調査が通らず、ここより返され帰国できない人もいた。ソ連軍の教育を受けた人物が、ソ連軍の事務をしていた。明日乗船出来る由、今晚はよい夢を見たい。さあ、帰国乗船。

ハバロフスクの思い出

大阪府 総 元 禄 朗

強制抑留最初の年はチタ州カルイムスカヤ駅といっても民家もなく、駅のホームさえない線路上に下車させられ、吹雪の降る山道を約十五キロ登ったシラカバの密林で伐採とそり運搬に従事して、多くの同士を極寒と飢えの闘いで亡くしたのだが、二年目の春、ダモイ、ダモイと列車はハバロフスク駅に着いた。さすがに街である。私はこの街で転々と変わったラーゲルに

収容させられた。一夜明けると原野を港湾労働者を満載したトラックがもうもうたる砂塵を巻き上げながら、工場の方へばく進する。歩いている労働者は、手を上げさえすれば車は急停車して快く便乗させる。さすがは共産国だと思った。乗用車は全く見られない。女たちも平気で畑のキュウリ、トマトの野菜をもぎ取ってはほおばりながら同じ方向に歩いている。後ろからトラックが来れば、やはり手を上げて便乗して行く。何か活気あふれた別社会を見るような気がした。

よさそうな中年男が待っていて「おれはこの小屋の責任者だ。お前たち三人で小屋の中にあるれんがを積み上げ、まずパン焼き窯をつくってくれ」と、その設計図を見せてくれた。なるほど三人でパン工場をつくれというのか。ヨシよい仕事にありつけたと考え、気合いをかけて五日間でこの窯を仕上げてやった。男はよほど気をよくしたらしくて、我々の隊長に面会を求め、続いて三人をパン製造工にさせたい旨申し出た。隊長即刻承諾したらしく、三人は当分の間、パン工場に出向勤務をすることになった。

こんな場合、收容所を出れば、市民と同じ扱いを受けることになるらしい。朝五時に出向。夜は十時過ぎても天下御免。衛門はスイスイ通過することができた。

さて、毎日の作業内容は次のようである。

男の指導に従って教えられたとおりに行動した。二人は外でまき割りと水汲み役。私は小船のような容器に、パン粉に定量の水、イースト菌を混ぜ合わせて醗酵させる。ある程度時間を置いてかられんが型した鉄の型枠に原料を詰める。一方では窯にまきを積めてどんどんと燃やす、燃えきった余熱でパンを焼き、ソ連独特のれんがパンができ上がる。変なことだが、パン窯は内地で見る火葬場の窯とソックリなのにガツカリする。

午後になれば二人は明日の準備に取りかかる。私は製品を地区の各配給所に配達せねばならない仕事が残っている。しかしこれがまた楽しい。馬車に積んだ製品をだればはかることもなく緑滴る並木道を次々に届ける。いつの間にか、主人や客人と心安くなって市民との交流が始まる。

どこの主人も飲み物や菓子などを恵んでくれて励まし、労ってくれた。やはり、中年以上の市民は我々に對して親しく激励してくれるのでうれしく思った。やがて五時になると、公園の会館屋上から懐かしい日本のメロデーが流れてくる。一刻も早く工場に帰らねばならない。

馬のくつわを緩めて二、三回しりをたたいてやると馬は鈴の音さわやかに工場の方に向かつて走つてくれる。三人の夕食は変形した商品価値のないパンを腹いっぱい食って残りは袋に詰めて持ち帰ることにしている。みんなへのお土産だ。仕事も一段済んでヤレヤレ……。

ところが湖畔で近所の女の奇妙な風習を見た。多数の女性がシミーズ一枚のまま、河に入り着たままで洗濯し水浴している。水浴が済むと体も着衣も乾くまで砂の上に寝そべりながら楽しそうに語り合っていた。時々我々にも話しかける。双方物まね手まねでどうにかわかる。まず日本女性のことを聞きたがっていた。文化にはど遠い感じがして気の毒に思えてならなかつ

た。

シベリアの昼は長い。七時八時ころはまだ明るい。いよいよ収容所に帰る時刻になった。準備しておいたパンの袋を担いで工場を出た。まず衛兵にパンを与えると、何の苦もなくスイスイと通してくれた。

班内でも我々の帰りを待っていて大喜び。毎日曜日は工場も休みますが、管理人は私を自宅に招待してくれるのです。部屋には大きな地球儀が置いてあって、まずソ連邦を指差し、少し左に回して日本を指差す……「どうだね、お前たちの国はここだ」と、さもご満悦である。

食卓では黒パンとキャベツ、トマト、キュウリ等大皿に盛り上げ、ロシアスープが登場する。かつてハイラルに駐留していたころ食事に行つたレストランの定食を思い浮かべて感慨であつた。時にはウスリー河周辺を四輪駆動車でドライブしてくれることもある。

あれが溥儀氏の収容所、こちらが関東軍司令官の収容所だ等、手話で説明してくれる。うそかまことかうンウンとうなずいてやつた。

やがて工場の作業も市民の手に委ねることになり、私たち三人は、何だか惜しまれつつ工場を去ることになった。

その後私は、各収容所を転々と移動させられ、そのうちに新しい年を迎える日がやってきた。

春とはいっても零下何十度、作業に出る者、班内に残る者、もはや重労働でもないらしい。同志たちはよくやく心身ともに落ち着き始め、夜になればお国自慢や歌も出るようになった。そのころであつた、我々の作詩作曲ハバロフスク小唄が流行し、歌い始めたのだ。しかし収容所には楽器などあるわけもない。そこらにあつたうちわを集めて伴奏した記憶が残っている。

私のシベリア抑留

岩手県 田 辺 杜 久

参 戦

昭和二十年八月九日、歩兵第九十連隊第四中隊挙げ